

## ダニエル・ステルン『1848年革命史』に現れる民衆

坂本千代

1848年の二月革命はフランスのみならず全ヨーロッパ世界の19世紀半ばにおける最大の政治的・社会的事件と呼んでいいであろう。本稿ではその二月革命の記録として知られているダニエル・ステルン(Daniel Stern)著『1848年革命史』(*Histoire de la révolution de 1848*)で民衆(peuple)がどのように描かれているかを考察する。

まず、二月革命とはどのようなものだったのだろうか。背景に1845年以来のフランス経済の不況があった。ルイ・フィリップ王のもとで政府はこれにたいしてなんら有効な対策を講じることができず、失業や倒産がふえ続けていた。政治家と大資本家の癒着にかんするスキャンダルが次々と起り、政府の腐敗は誰の目にも明らかであった。そして、1848年2月22日、共和主義者たちがパリで大がかりな「改革宴会」を開こうとして、政府がこれを禁止したことをきっかけにデモが始まった。翌日になるとデモに参加する民衆がさらにふえた。午後10時ごろコンコルド広場で、警備にあたっていた軍隊がとつぜん民衆に発砲して約50人の死者がでた。このため24日の朝にはパリ市民は反政府側につき、1500ほどのバリケードが築かれ、武器が集められた。まもなく市民らは市庁舎を占拠し、王のいるチュイルリー宮殿に進みはじめた。正午過ぎ、ルイ・フィリップはパリから脱出し、のちイギリスに亡命する。翌25日には共和制の樹立が認められて、1789年の大革命以来2度めの共和政治がはじまるのである。臨時政府の閣僚には有名な詩人で政治家のアルフォンス・ド・ラマルティーヌなど11名が選ばれた。

ラマルティーヌが当時しげしげと出入りしていたサロンの女主人がマリー・ダグー伯爵夫人、筆名ダニエル・ステルンという文筆家である。ステルンの『1848年革命史』は4部にわけられており、第3部までが33章を構成している。まず第1章から7章まででは革命直前の状況が語られる。1848年2月22日(火曜日)に予定された政府批判の改革宴会をめぐる政府側の動きや反対勢力の動向、そして21日になってギゾー内閣が宴会に禁止令を出したことが述べられている。ステルンが二月革命の初日となった2月22日を描いた第8章をまず考察する。

この部分を読んですぐに気づくことは、民衆(peuple)がまるでひとつの体と意志を持つひとつ生命体のように描かれている点であろう。ある時はてんでばらばらの群衆、ある時は暴徒としてとらえられることがあっても、本質的には善良で正義を求めるひとたまりのものとして民衆を見る、これはフェリシテ・ド・ラムネやジュール・ミシュレらの共和主義的ロマン主義あるいは「民衆教」とでも呼べる傾向をステルンも持っていることを示している。

ミシュレは『フランス史』において、フランスにおける「民衆」の最初の出現は14世紀初頭にフィリップ美魔王が召集した三部会であり、その後百年戦争の頃にその姿がはっきりしてきたとする。当時の民衆とは支配階級以外のすべての人々(農民、町人……)をさす。ミシュレによれば、民衆ははじめの頃ほとんど「けもの」か子供と同じように無知で野蛮な生き物であったが、やがてその内部に秘めている力につきうごかされて成長していく。百年戦争や支配階級による搾取等、民衆は苦難によって鍛えられ、だんだんと自らのアイデンティティを自覚するようになり、やがて彼らの中から1789年の革命のエネルギーが生まれてくると彼は考えるのである。

さて、ステルンは1789年の革命と1848年のそれを比べると、前者には多くの偉大な登場人物がいたのにたいして、後者にはそのような傑出した人物がいない(ナポレオン一世とルイ・ナポレオ

ン・ボナパルトを並べてみれば明らか)と考える。そのわけはなぜかというと、1789年に歴史の表舞台に初めてはっきりと姿を現した民衆が、1848年には十分成長していて、「英雄」や「偉人」なしでも革命を起こし共和国を作ることができたからだろうと推測する。ここにも、さまざまな経験をしながら永遠に成長していくものとしての民衆という基本的なイメージがある。

次に革命2日目から3日目にかけての深夜のできごとをステルンが描いている部分を見てみる。その日外務省前で起こった銃撃戦の犠牲者の遺体を「山車(だし)」のように荷馬車の上に並べてパリの町をねり歩く労働者たちを描いた部分である。ステルンのこの文章を引用した歴史家の喜安朗は、カーニヴァルがせまっていたこの時期、毎年行われるパレードでの演技行為(さまざまな山車、行列に加わっている者たちと見物人たちとの言葉の応酬など)の記憶を身体の中によみがえらせつつあった民衆が銃撃事件に出会うことで、とっさに抗議行動をカーニヴァルの山車の行列として出現させることになったのだと述べている。

ここに描かれた場面には、教養ある支配階級の人々より「自然」にもっと近い民衆、感情と行動が直結した素朴な民衆というきわめてロマン主義的な、ほとんど紋切り型とも言えるイメージがはっきり現れている。ここで言及されているダンテの『神曲』はマリーが生涯愛し続けた作品であった。民衆の行動の中に天才芸術家と共通する、あるいはそれをしのぐような創造性を認めるのもやはりミシュレらの天才論の系譜に属するものであろう。

さて、臨時革命政府は21歳以上の男性の投票で憲法制定国民議会の議員を選ぶ普通選挙を4月23日に行うことを決定した。これはフランスでは史上初めての普通選挙である。その準備をすすめるうち臨時政府にとってのさまざまな問題があらわになってきた。

まず、首都パリと地方の住民たちの革命にたいする温度差である。労働者など民衆が立ち上がって王を追放した共和主義的なパリの人々と、土着の名望家たちが力を持ち、急激な変化を望まない保守的な地方の人たちでは当然新政府に期待するものが違っていた。

もうひとつの大きな問題は2月28日に臨時政府が設立した「国立作業場」である。これは失業中の労働者を集めて登録し、政府が公共事業に彼らを従事させて1日2フランの賃金を支払うというものである。仕事がない場合も1日1.5フランの手当が支給されることになっていた。パリの国立作業場に登録したものは3月4日には約3万人だったのが、5月末には10万人にまでふくれあがった。革命による混乱やそれ以前からの不景気で労働者の失業率が非常に高かったのに加え、仕事がなくても1日の手当が保証されているのにひかれて、不安定な収入しかない仕事を捨ててこちらに登録する者がいたり、パリの外から失業者が流れ込んできたからである。

一部の人々が当初から予想したとおり、この膨大な数の労働者を雇うのに十分な公共事業はなかった。それでも毎日の手当を支給しなければならず、国立作業場の存在は政府の財政にとって大きな負担になっていたのである。

4月23日、予定通り史上初の普通選挙が行われ、その結果にパリの労働者たちは失望した。5月15日、扇動者にひきいられた民衆が議会になだれこみ、クーデターを起こそうとして失敗する。指導者たちは次々に逮捕されていった。

5月15日の事件のあと国立作業場の廃止は時間の問題となる。政府は6月21日に作業場を閉鎖し、25歳未満の労働者を軍隊に編入し、その他は地方に送って土木作業に従事させることを決定した。23日、ついに労働者の蜂起がおこり、カヴェニヤック将軍指揮下の軍隊と衝突することになる。二月革命勃発に際しては反乱側に回った国民軍は、今度は政府側についた。共和国の首都において民衆が二つの陣営に分かれて争う凄惨な六月暴動の始まりである。ステルンは

後にしばしば言及されることになる有名な戦い、6月23日のボン・ヌーヴェル大通りのバリケード攻略を国民軍の側から詳しく描いている。

6月27日になると政府側と反乱者側に多数の死者と負傷者を出し、1万人以上の逮捕者を生んだ暴動は完全に鎮圧された。2月22日に始まった革命がこれで終わったことを誰もが感じたのであった。

12月10日に行われた大統領選挙の結果にマリー・ダグーは絶望した。彼女の暗い予想は的中し、ルイ・ナポレオン・ボナパルトが553万票という圧倒的多数でフランス共和国初代大統領に選出されたのである。ルイ・ボナパルト大統領は1851年12月にクーデターを起こし、翌年ナポレオン三世となるであろう。これによって第二共和制が終わり第二帝政となるのである。

マリーは1850年から53年にかけてダニエル・ステルンの名で『1848年革命史』を刊行する。そこに描かれた民衆は、上で見たようにミシュレらのロマン主義的民衆像の特徴をはっきり表している。文学史的に言えば、二月革命の終焉とともにフランスロマン主義にも幕が下ろされたのであるが、ロマン派世代の作者の書いたものの中では、その後もなおロマン主義的な民衆観が命脈を保つのである。共和制から帝政になったとはいえ、義務教育の普及等によりこののちフランスの民衆はゆっくりと、だが現実的に力につけていくことになる。1870年の帝政崩壊後、パリ・コミューンの反乱などで大きく揺れ動きつつも、その後フランス二度と共和制を捨て去ることはないであろう。